エレメント・ザ・ワールド

AQUA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エレメント・ザ・ワールド

【Ｎコード】
Ｎ６１９２Ｚ

【作者名】
ＡＱＵＡ

【あらすじ】
ある日の物語・・・
一応ファンタジーです

『パソン・ウルルフス』

『パソン・ウルルフス』

俺は朝の日差しで起きた。
いつもの様に下へ降りる。
　けいは
「慧播　兄ちゃん！」
妹だ、妹とはいえ義理だが。
　はくあ　みかん
名前は白亜　蜜柑
俺は武田　慧播
親が2人とも行方不明になった
「兄ちゃん今日一緒に帰ろうね！！」
妹は根っからの『お兄ちゃん』大好きっ子だ
義理なのにそんなに大好きなのか？
「ハイハイ」
「おいしい紅茶の店見っけたんだよ」
いこうねと言われ断れなかった
また俺がお金払うんだろ…
いつもの様に学校へ行った
そう『いつもの様に』

『お…オイ！！！！！！』
なんだ？
朝に聞こえた声か？続き？
『異常事態だ！』

お前がな。
『呼んでくれ！勇者を！』
誰？勇者って？
「まあいいや」
無視して授業にいった。

ここからだった『異常事態』は………

６時目が終わり
１回もあの声が聞こえていない。
やっぱり空耳。
そう信じよう。
『はぁぁぁぁぁぁぁぁ』
また空耳？
「お兄ちゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜ん！！！」
そんなスピードで来たら俺にぶつか—
ゴスッ
俺は妹にタックルされた。
「ごめんねお兄ちゃん」
ごめんねで済ますんだね…
『来い！勇者よ！！！！』
何が————
俺は目の前に現れた黒い塊に吸い込まれた。

意識がとんだ――――
グルグルしたり伸びたり縮んだり――――――――――――――――――――――――
「う・・・ゆう・・・しゃ・・・・・」
ん？
意識がもどった…
「勇者様」
俺の前には青い髪のいかにも『高貴な人』な人がいた
「は？」
「リアンワールドからの勇者様」
リアンワールド？
「ここはエレメントワールド」
は？そんな非現実的なことが起こってるの？
「私はこの国の次期王、レイブンと言います。それではお話します」
と言い手から古ぼけた本が煙を上げ出てきた
『ここはエレメントワールドこの世界はあなたたちの世界リアンワールドとは表と裏の関係　裏のこの世界があるからあなたたちの世界がある。裏のこの世界が危機にあるこの世界が消滅すればあなたたちの世界も消滅するのです』
「ふーん」
「消滅の危機というのは魔王の降臨」
ふぁんたじー！
「この国の言い伝えによるとリアンワールドは凄まじく強い勇者がいてその勇者はこの世界を救うと言われています。」
話が一旦終わり、本を持った魔術師のような人物が続けた。
「我々は魔王を倒し、封印する為にあなた方を降臨させたのです。」
あなた方？後ろを見ると蜜柑がいた。
「お兄ちゃん、ここ、どこ？」
「今言っていただろ。」
話によるとここを含めて7つの国があるらしい

家と家の間にやけに毛が長くシルバーの髪をし、服はボロボロ、『狼』と言う雰囲気の人がいた
よく見ると涙を流している。
「あの子は何だ？」
と聞くと

パソン・ウルルフス

「あの子は獣の種族『人狼』です。」
「『人狼』か…」
「強いのか？」
「はい、ですが、虐めにより心を閉ざしてしまったのです。」

見てくださりありがとうございます

『ナカマ・タビダチ』

「あいつの名前は？」
「ウォルフです」
「覚えておこう。」
「さあ、宮殿へどうぞ。」
そして宮殿に着いた
「広ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉい」
「ご自由に歩き回っていいですよ。」
「お兄ちゃんいい？」
「ご勝手にどうぞ。」
やや適当に言ったが妹は走っていった。
数分後
「広いねこの宮殿、宮殿なんて初めてだからはしゃいじゃった。」
ハアハア言いながら言っている
「そろそろ本題に入ります。」
こちらへ。と言いドアを開けた
ギイイィィィィィィィィィィィィ
３ｍほどのドアを開けると、そこには御馳走があった。
「どうぞお食べください」
見る限り『こっち』の食べ物と同じようだ。
伊勢海老のムニエルやらピザの上にトリュフがのっていたり
「ありがとうございます」
と言い妹は馬鹿でかいチキンに齧り付いている
「…いただきます」
「本題と言うのは明日、入ってもらいたい泉があるのです」
「は？」
「まずこの国の伝説をお話します」
また手からポンッと本が出てきた

『むかしむかしあるとろこにおうさまがいました。
そのおうさまはこまっていましたそれはわるいまおうがあばれていたからです
おうさまはかんがえましたそしてちがうせかいからゆうしゃをよぶことにしました
そしてゆうしゃをよびましたでもそのゆうしゃはまおうにいどみ、まおうといっしょにしんでしまいました、そしておうさまはなきましたそしてゆうしゃをうめました
そしておうさまのなみだはゆうしゃのからだにあたりましたするとゆうしゃのからだからみずがあふれだしました。そのみずはやがていずみになりました。
そのいずみはちがうせかいのひとがはいるとさいきょうのちからがてにはいるようになりました。』
「と言う話です。その泉に入るとリアンワールドの魔力が開放し、最強の力が手に入ります。」
「はぁ…」
「ちょうど夕食も終えたので仲間を探しましょう
この表から残り6人選んでください。」
「いや要らない。」
「と言うと」
「あいつだウォルフだ」
「このくに一強いですが心———」
「聞いた」
行くぞといい蜜柑を連れて行く
しばらくし……
「なあ……」
「グワァァァァ」
ウォルフが飛び掛ってきた
「危なっ」
「グゥゥゥゥゥゥゥ」

「敵じゃない！虐めない！」
「嘘つくな！おいらをそうやって騙すんだ！」
「本当だ！」
「グッ」
ウォルフがいきなり苦しみだした。
「大丈夫か？」
「触るな！」
「フラフラじゃないか！食べ物もろくに食べてないんだろ」
「うるさい！」
「蜜柑、林檎を！」
「うん」
真っ赤に熟れた林檎を取り出す
「食え！」
「嫌だ！毒でも入っているんだろ！！！！！」
自分も食べてみせる
「大丈夫だ食べろ。」
ウォルフは泣きながら食べた……
「オォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン」
「俺の仲間になってくれるか？」
ウォルフは無言でうなずいた。
次の日……
「行ってらっしゃいませ、妖精の泉ですよ。　ウォルフ頼んだぞ」
「当たり前だ！主人はおいらが守る！」
「頼んだ！」
「じゃあ行くぞ！」
「うん」
「はい！」

見てくださりありがとうございます

『ナカマ・タビダチ』（後書き）

伝説はなぜかひらがなで書かれています

『ヨウセイノイズミ』

砂漠だ。どこまでも続く砂漠……
その中に3人の旅人がいた……
「ご主人ぃぃぃぃん」
「何だ？」
「おいら腹減った。」
「もう少し待て。もう少ししたら町に着く。」
「ワン！」
「兄ちゃ～ん」
「何だ？」
「のどか沸いたぁ！」
「もうすこしで町だそれまで我慢だ！」
１０分後
町に・・・・・着いていない
それから１０分後
今度こそ町に着いた
が俺は違和感があることに気付いた。
ウォルフが
「ご主人どうしたんですか？」
「変だ……」
蜜柑が
「どこが？」
と言い出す
見ればわかるはず
「外に誰もいないんだ」
「そういえば…そうですね…」
ドォン、ドォン、と地響きがする。

「ご主人、下がってください。」
ドォンと足音を立て黄色い巨人が来た！
「ヴゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ」
ウォルフの毛が一層多くなり全身から灰色の毛が生えてきた
見るからに『狼』だ。
「グォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！！！！」
吼えるだけで地面が震えている！
ウォルフは巨人に飛び掛る！
「グァァァァァァ！！！！！」
巨人は胸に突撃され声も出せていない。

胸に穴が開く。

肉が飛び散る

体が弾ける。

「ヴォォォォォォウ」
ウォルフの毛が戻っていく。
「これは何だ？」
と聞くと
パソン・ウルルフス　ウルフチェンジ
「『人狼』の技です名は『狼化』一時的に全能力を上げます。」
「そうか……」

心にぽっかり穴が開く

あいつは悪いやつなのか？

とかんがえているうちに人が集まってきた
「救世主よ！」
「せめてお食事を食べていってください！」
「お召し物や武器もさしあげます。」
「本当か？」
「はい！」
（……）
「ご主人！聞きましたか？」
「ああ食うか…」
「ハイ！」
2時間後食べ物を恵んでもらいご機嫌の蜜柑とウォルフはもう寝てしまった
「はぁ……」
もう満月近い月を見ながらため息をつく……

「どうしたのですか？」
後ろから宿屋の店主が来た
「今朝のことですか？」
「ああ」
「あの巨人が可哀想なのですか？」
「ああ」
「お優しいのですね」
「ありがとう……」
「でも、あの巨人は私たちを連れ去りに来たのです。」
と言い肩を叩く
「『命は無駄に使わない、悪を憎んで、命を憎まず。』ですよ。」
「何だ、それ」
「この地方に来た勇者の言葉です。」
ありがとう。と言い寝る

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6192z/

エレメント・ザ・ワールド

2011年12月29日12時48分発行